

日本災害看護学会 先遣隊活動報告

4月18日（月）の活動

活動者：山崎達枝・三澤寿美・西上あゆみ・末永陽子

当日の状況（2016年4月17日～18日）

余震はあるが、前日以上にひどい地震もなく、経過する。天候は曇り。

1. 行程ならびに訪問先

8:00 ホテルを出発

山崎・三澤班と西上・末永班の2班に分かれてレンタカーにて活動。

1) 西上・末永班

9:50～10:00 熊本市北区役所

10:20～10:30 熊本市北区コミュニティセンター

10:40～11:30 熊本市北区内避難所訪問（小学校）

12:45～13:15 熊本市中央区内避難所訪問（中学校）

13:30～14:00 熊本市内中央区内福祉避難所訪問（介護老人福祉施設）

14:25～15:30 熊本大学医学部保健学科 宇佐美しおり先生研究室
（山崎・三澤班と合流）

15:30～ 山崎・西上・末永は帰路に着く。

2) 山崎・三澤班

8:40 朝の打ち合わせ後ホテルを出発

10:40～12:30 熊本県内特別支援学校

14:30～15:30 熊本大学医学部保健学科 宇佐美しおり先生研究室
（西上・末永班と合流）

3) 三澤・小原班

17:00 ホテル着

17:30 ホテル出発

18:30 熊本県看護協会到着、小原理事長と合流

18:30～20:10 熊本県看護協会 会長・副会長と面会

21:00～22:00 滞在先ホテルにて、小原理事長と打ち合わせ

22:00 活動終了

2. 活動内容

1) 熊本市北区役所・コミュニティセンター

北区役所で地域の被災状況を伺った。被害は少なく、開設している50弱の避難所も土曜日より調査を進め、本日中にすべて把握できるとのことであった。今後は、厚生労働省からの保健師派遣があり、ローラー作戦で巡回をすること。訪問時は、AMAT, JMATの会議が行われていた。

2) 熊本市北区内避難所

避難所となっている小学校を訪問した。約 20 台の車が駐車していた。避難所として教室、体育館が使用されていた。行政担当の方が持ち回りで管理をしていた。訪問時、体育館には 20 名程度の方がいたが、夜には 120 名程度の方がいるとのことであった。年齢構成では偏りもないとのこと。生活用品はほぼそろっており、加えて一般の方からの食事の差し入れもあり、温かいご飯も食べられているとのこと。木曜日から授業が始まるとのこと、教室の被災者を体育館へ集約されるとのことであった。

避難している人の中には、東区から移動してきた人がいた。自宅近くの避難所は足の踏み場もないほど混み合っており、障害を持つ家族がいることから、2 つの避難所を経由してここへ移動したといわれた。前の避難所では、食料をもらえず、家族の一人が電源を使用する機器が必要であることから移動を余儀なくされた。今は、家人のリハビリが中断していることを心配されていた。周囲に迷惑をかけないように気を遣われている様子があり、傾聴の途中からは堰を切ったように涙を流して話された。

行政の担当者・小学校の校長は、避難者に困り事がないか気にかけている。私たちが、女性更衣室や生理用品の確保、プライバシー保護のためのパーテーション設置、手指消毒薬の設置、生活リズムがつくようなルール作り、子どもの遊び場などの必要性について、情報を提供するとすぐに更衣室については張り紙をされるなどとりかかられた。

3) 熊本市中央区内避難所

地区の自主防災クラブの方が運営をされていた。この代表の方にお話を伺った。自主防災クラブには防災士の資格を取っている方がいて、柔道場の畳やエアーマットを使用する工夫、ダンボールでパーテーションを作製する、消灯の管理など、被災者の生活環境を整えられていた。しかし、そのパーテーションも避難者が多すぎて外さざるを得なくなり、訪問時も校舎から人々があふれ、軒下で生活をされている人もいた。訪問時は、水道、電気は復旧していたが、断水時はプールの水をトイレ水として使用したと話された。

避難者の様子は、家があるが、自宅にいたことが不安でここに来ている人、自宅の倒壊でここに来ている人がいて、避難する理由が異なることで人間関係がむずかしいところもあると話された。原則ペットは禁止としたが、小動物のペットから離れられない方もあり、事情の同じ方を同じ部屋にする努力がなされていた。

急病者が出たときは 119 番している。地域内に福祉避難所として介護老人施設があることからここへ 30 名送られた。保健師調査は入ったが、感染症対策や高齢者が多いことから、健康状態を見てくれる看護師が早く介入して欲しいと話された。

4) 熊本市中央区内福祉避難所

地域の福祉避難所として指定されており、30名程度の方が避難してきている（最大は60名）。しかし、元々の施設入居者で満床であり、職員も被災者がいる中でマンパワーにも限界があるため、施設の利用はできるが、生活支援を必要とする方が利用するには家族の付き添いが必要と話された。施設内の設備としては、井戸水があり、停電も一時的なものであった。衛生用品などの配給もあり、施設としては良い状況であると話された。

被災者については、一般避難所を経てここに来られており、おいてもらえるだけでありがたいと施設職員に対してほぼ要望を出されてこないと言われた。こちらが勧めないと座った状態で、横にもならない被災者さんがいたとのことであった。福祉避難所として被災者さんを預かることは、もしその方が体調不良を起こされた場合、対応できるかどうか、申し訳ないと心配もしていた。

施設職員については、自宅の被災から休みたいと考えている職員は多いと思う、しかし、マンパワーが不足すると入所者への対応が出来なくなるため、頑張ってもらっていると話された。職員が体調不良を起こさないか心配するとも話された。

5) 熊本大学医学部保健学科 宇佐美しおり先生研究室

熊本大学教授宇佐美先生と情報交換を行った。今回の先遣隊が見てきた情報を提供するとともに、宇佐美先生が県看護協会会長と連絡を取っている状況などをお聞かせ頂いた。

6) 熊本県内特別支援学校訪問

教頭さんに対応していただいた。学校は住宅地の中にあり、2年半前に学校を現在の場所に新築移転し、小学部（低学年、高学年）・中学部・高等学部の4室に分け在学児童・生徒64人が在籍しているとのことであった。安心安全と児童生徒一人一人の力を伸ばす教育を目標にされている学校であり、施設設備が整っていると同時に、特に児童生徒とその家族に対する教職員の配慮が行き届いている印象であった。重度重複障がいを持つ児童生徒の特別支援学校であり、数人の在校生と家族が避難され1家族に1個別教室を居室として提供されていた。体育館周辺の施設を地域住民の避難場所として提供されていた。在校生とその家族の避難場所と地域住民の避難場所は明確に区別し、安心して在校生と家族が避難生活を送れるように配慮されていた。

体育館周辺に避難している住民は、勤務終了後、夜間等にこの場所に避難しているとのことであった。逆に昼間不在となる家族の居場所を確保するため、その場所で過ごし、夜家族が戻ると昼間場所を利用していた家族は車中に戻るといふ家族もいた。避難場所が狭く、廊下などの隅で過ごす被災者

もおられた。被災者の方からは「耐震・免振という建物で安心できる場所で避難できることが何よりうれしい」と語られた。

内服薬を持参して避難している方、治療中の疾患をもつと思われる高齢者の方が多数おられた。

7) 熊本県看護協会 会長・副会長と面会

熊本県看護協会では、災害支援ナースの帰着の対応中であった。

現在、レベル1の対応により、2つの避難所に支援ナースを派遣している。2交代制で、日中（8時間）3人、夜間（16時間）3人体制で対応中であった。熊本県看護協会登録の支援ナースの所属の施設の被害もあり、支援ナースの確保に苦勞しているとのことであった。A避難所では（通常では保養施設）DMAT常駐のほかJMATの巡回もあるため骨折・外傷のある被災者の対応を行い、B避難所は1,000人程度の被災者が避難し、夜間は車中泊が多数あり、子どもと高齢者を優先して建物の中で過ごしてもらっているとのことであった。支援ナースからの情報では、子どもの脱水、インフルエンザとノロウイルス感染症発生の報告があったとのことであった。

4月20日夕方よりレベル2の対応予定であり、福岡県看護協会より8人の支援ナースの派遣が決定しているとのこと、その調整中であった。沖縄県と大分県以外の県看護協会からの支援ナースの派遣を予定しているとのことであった。また、5月8日まで、熊本市周辺15市町村に保健師の派遣・配置が決定しているとの情報があった。

熊本県看護協会会長さん、副会長さんも被災されており、車中避難、避難所から看護協会へ出勤され、対外対応、支援ナース等への対応を行なわれ、大変頑張っておられた。

3. 健康問題

乳児がいる母親は、ストレスにより次第に母乳が出なくなってきたと、涙ぐんでいた。

BiPAPを行っている被災者は、電気が必要であるが混み合った避難所ではコンセントの確保にも難しい状況であった。

避難所で生活するなかで、日中も避難所にいる方と、日中は避難所外で活動し、夜間に睡眠するためだけに避難所にもどる人では、生活リズムにズレが生じている。そのことから、不眠や苛立ちを訴えていた。

被災者自身が、今後健康問題が生じてくることを予測し、看護師に来てもらいたいと訴えていた。

支援している方から「喉頭がんで食事の摂取が難しい方に、おかゆを磨り潰してお渡ししました。ペースト状までにできたらよいのですが・・・」と十分に対応できないことに対して、すまなそうに話された。体育館には横になっている高齢者や膝が痛いので椅子に腰かけて過ごす高齢者の姿が目立ち、足

がパンパンに浮腫んでいる方もおられて、注意点・ケアについて説明したが、震災関連死に繋がらないよう医療班の巡回や福祉避難所の立ち上げが重要だと思える。

4. 課題

行政の担当者の中には、平時は他の業務についているため、被災者のためにどのように避難所を運営すればよいか考えるが手段が思いつかないという方がいた。情報提供をすると、避難所の責任者と調整を図り、実行している様子から、今後の避難所設営・運営のための情報提供が必要かもしれない。

保健福祉施設など勤務する職員も被災者であるが、自宅の片付けなどの問題よりも勤務を優先し活動を続けており、被災後、4日目となり、疲弊してきている様子が伺えた。時間をかけて説明してくださった方は、「一時でも話ができることが嬉しいです、自宅の室内は手が付けられない程散らかっていますが地震当日からずーっと此处です」と時には笑みを浮かべながら話された。早めに自宅に帰れること、休める体制が必要と思われる。

被災者自身が今後の体調のことを不安に思っている現状があり、被災地内のケア提供者の疲労がピークに達しようとしている今、健康や生活環境を見てくれる看護師の組織的な介入が必要であると考えられる。

5. その他

宿泊していたビジネスホテルでは、高齢の家族を避難所においておけないとビジネスホテルに泊まっている方がいた。

西上・末永班は、熊本市、益城町以外の市町村の避難所訪問を考えていたが、交通渋滞がひどく熊本市内の避難所訪問に切り換えざるを得なくなった。

山崎・三澤班は、他の特別支援学級を回ったが、渋滞により到着時間が遅くなり十分にお話を伺えずに次の訪問地熊本大学保健学科に移動した。

立ち話で職員の方より「生徒は休講として、自宅および避難所に居る」という話を伺い、避難所内での生活は厳しいのではないかと思われた。障がいのある方とそこそご家族の避難所生活について考えていくことが必要。